

枕木の詩

川柳句集

枕木の詩



著 者 (47歳)



森田若人句碑建立川柳大会(倉吉・誓願寺)

故人となった若人氏(前列左6番目)、日満氏(若人の後)、源太夫君(2列目左端)三銘君(最後列の木陰)も勢揃い



米子鉄道学園(鳥取境港)

西尾憲治君(現、短歌の西尾昇龍)と著者



米子鉄道学園入学当時



国労組合青年部長の頃(長野県松本市)



鳥取県立東高校柔道部の頃



鹿野町吟行会(川柳友の会)幸盛寺 S.40年4月



出雲大社に於て  
妻(君江)、長男(直樹)、長女(弘恵)



次女(千春)と(大山にて)



柔道世界一の山下泰裕氏を囲んで



日本海川柳友の会大会(鳥取市内・遺族会館)



全国鉄川柳人連盟第19回鳥取大会  
(鳥取砂丘にて)



国鉄鳥取川柳会の旗



故 住田三鈴君と共に



第8回全日本川柳大会(米子市にて)



第8回全日本川柳大会前日(茗人荘にて)  
橘高薫氏と東野大八先生と共に



故 伊藤勢火氏への弔辞



披講中の著者



川柳塔鹿野みか月8周年記念大会  
「半端」汗だくの選(農業者トレセン)



藤沢岳豊川柳句集  
「べっこ」 発刊記念大会  
昭和五十四年(盛岡市)



全国鉄川柳人連盟三原大会に於て



村尾草樹氏祝賀パーティーにて

## 序 文

柳界のスーパーマン両川洋々君が、この度「枕木の詩」という、素晴らしい句集を出すことになった。

その序文を發刊一ヶ月前の九月二十日にやっと一件書類を速達便で送ってきた。そして折り返し序文を書けというのである。流石スーパーマンらしい間髪を入れざる妙技ではないか。

彼が川柳を始めたのは、高校生の時（十七歳）の新聞投句からで、之という師匠にもつかず今日のポストを築きあげて、今度、句集を刊行するというのは、スーパーマン洋々君の貫録である。彼の略歴を拾ってみると、高校を出て国鉄へ入社、九年後国鉄鳥取川柳会を結成して会長となり、翌年には川柳塔社同人となる。

昭和六十二年三月、国鉄がJRに移行するに伴い該川柳会を解散し、川柳ふうもん吟社を起して会長となり、愈々川柳に熱が入り、山陰本線湖山駅に小、中、高校生の川柳作品を展示してテレビで紹介されるなど、活発な活躍をしている。

尚この度、彼のスーパーマンのスーパーマン振りを發揮したのは句集發刊の忙

しい中に鳥取市議會議員にうって出たことである。

句集は『鐵路の抄』から始まる。

保護色に染まり切れない日を焦り

枕木よお前の愚痴は俺がきく

安楽死しろと鐵路を雪が埋め

枕木が工夫の歌をまだ覚え

ロボットに斬られる首を洗つとく

仲々佳い句が列んでいる。社会党の句である。

『世相の抄』

校門に死刑執行官が待つ

消費税やれまた息を吹き返す

浮動票ここで一票酔いつぶれ

離農する肩とも知らずトンボ来る

時事川柳もまた絶妙である。

『酒と仲間の抄』

酒代は安いものさと病んで知る  
運勢欄ある日は離婚けしかける  
オリオンの真下で奪う昏よ  
あっけない幕切れでした癌でした  
最後の抄は「家庭の抄」である

市議会へ風穴あける意気にもえ  
貧乏神がうちで足踏みばかりする  
妻叩くかわりにビール二本あけ  
立候補の俺のわがまま許されよ

と家庭の句もそう甘くない、どこかに反骨精神の陰がある。社会党から打って出るのに相応しい川柳である。最後に御当選を祈って、ペンを擱く。

祝吟

当選の万歳うける夫婦雛

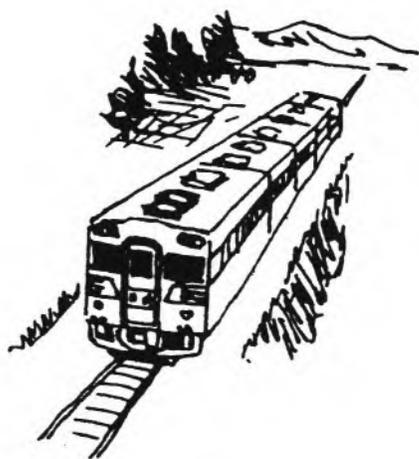
平成二年秋彼岸の入りの日 水鶏庵にて

西尾 栞 識

# 目次

序文	川柳塔社主幹	
作品	西尾	
鉄路の抄	葉	1
世相の抄		47
酒と仲間の抄		113
家庭の抄		155
跋にかえて	鳥取県川柳作家協会々々長	
あとがき	小林由多香	
	両川洋々	

# 鉄 路 の 抄



4475

-270

✓ 枕木の寝言も聞いて旅ひとり

✓ 野晒しの貨車よ泣くなと枯葉舞う

✓ 雨しとど赤字レールよ泣くでない

✓ 保護色に染まり正論もう吐かぬ

✓ 儲けろと貨車にも暗示かけてやる

~~○~~ ストの日のホームのんびり鳩が舞い

○ 正論を吐けば吐いたで敵が増え

✓ 友情を斬り捨てました酒苦い

✓ ロボットに斬られる首を洗つとく

✓ 駅高架 赤字のたうつとは見せず

○  
出世してしまえば恩が邪魔になり

✓ 民営と言う組板へ貨車をのせ

✓ 負い切れぬノルマにレール軋みだす

✓ 濡れ衣のまままで左遷は見送られ

✓ 屠殺場は厭だと貨車が首を振り

✓ 合理化無惨あゝ働ける首をはね

○ 下積みの汗をエリート知るまいな

✓ 保護色に染まり切れない日を焦り

✓ 不器用に触れず手の豆いたわられ

✓ 出世へのキップ欲張る手から落ち

✓ 赤字でもレールは尻尾など振らぬ

✓ 栄転を妬む目と目に見送られ

✓ 回答がまだ出ぬストが荒れ狂う

✓ 売れ残る貨車がため息ついていた

✓ 頑張ったレール赤字の罪を負う

✓ 再建論へ遠くレールの叫び聞く

✓ 顔たててやれば二度目も来て甘え

✓ スクラムを組む日のバッジよく光り

✓ 信じてた友が仕掛けた罠に落ち

✓ 棒グラフ正直すぎるから怖い



稼げ稼げと企業戦士へラッパ吹く

✓ 条件という足枷に引きずられ

✓ 枕木の鳴咽がレール眠らせぬ

✓ 満員の夢で枕木今朝も覚め

✓ 分割民営 外堀一つずつ埋める



枕木の意地だレールは錆びさせぬ

捨て石になる気だ理想など追わぬ



ストの日の駅を乾いた風が抜け

民営分割あゝ蜃気楼見てたのさ



廃止線 錆はレールの涙かも



✓ 左遷への旅と知らない子がはしゃぐ

奇跡のように吹雪く深夜へ汽車が着く

✓ 分割にレール衰しい音をたて

✓ 枕木の嘆き総理にや判るまい

✓ ひた走る列車へ赤字なすりつけ

し 下請けの首を合理化切って捨て

✓ 明日からは無人ポイント磨きあげ

✓ 同志からはみ出す赤い思想とか

○ ほどほどに出来ぬ気性でいて疲れ

伝言のミス真夜中の駅を発ち



✓ 菜っ葉服の下に一揆の血が流れ

✓ 少数で吐く正論はもみ消され

✓ もうストは止めろとレール鏝を抱く

② 働いた手へ働いた汗が落ち

① 汽車を出す僕を秒針追いまくる

枕木よお前の愚痴は俺が聞く

口応えせぬから貨車がいとおしい

列島のレールを政治切り刻む

無理矢理に剥がしや枕木きつと泣く

国鉄の赤字へ当てるメスがない

花道も遊びも父の貨車知らず

枕木の息切れ貨車が聞いていた

矢弾尽き今日を限りのレール剥ぐ

安楽死しろと鉄路を雪が埋め

遊びなど知らぬ軍手のひとり言

セールス  
の戦果あがらぬ靴がちび

枕木をめぐりや無念の血が匂い

のた打ってレール安楽死ができぬ

辞表書く紙の白さに立ちすくむ

始発いまドラマをのせて北へ発つ



我が道を歩む儲けに遠ざかる

靴のひも急げば急ぐほど纏れ

思案した挙句迷わぬことに決め

足向けて寝られぬ恩がひとつ増え

四捨五入の俺だけ四捨にいる焦り

レール泣くなと夜汽車かなしい笛を吹く

廃線の枕木だって夢を追う

広域出向そんな踏み絵は踏めません

ワンマンのある日は雲とだけ話す

再建へ赤字の貨車も息が切れ

職場にも友には友の敵があり

正論を吐く日しよせんは一人です

北風よ俺の生きざま見ておくれ

雑魚いつか湖を抜け出す夢を追い

くるま座の中の一人が振る叛旗

転勤に慣れて器用に荷をまとめ

ワンマンの心だれにも覗かせぬ

止め役が逆に辞表をたたきつけ

返り血を浴びない位置で抜く鼻毛

相打ちも覚悟だ心まで売らぬ

反主流が振る旗だから血が匂う

春闘の匙から弱者またこぼれ

廃線のレールが春の草に咽せ

再建へ遠く空車の貨車を組む

目減りする命で運ぶサラリーよ

スト解除時計うれしく昼を告げ

貨車よ貨車赤字の汚名ひつかぶり

枕木もレールも赤字気付いてた

俺の靴今日のいくさへ揃えられ

切り捨てのプランへ貨車の失語症

ゲンコツを開くと怒り一つ落ち

もう二度と枕木人を信じない

再建の熱意へ遠くレール錆び

振る旗の一つ一つにある叫び

あの日から枕木夢を見なくなり

ノルマますます増えて鉛の靴をはく

解体のさだめ哀しい貨車を牽く

枕木の嗚咽を土筆聞いていた

野晒しの貨車よ汽笛で目を覚ます

枕木のなぐさめレール慟哭す

民営分割レールも悲鳴聞いていた

②

もう一人待って団体みな遅れ

コンピュータに俺も数字で打ち込まれ

枕木よ意地だ弱音を吐くまいぞ

スクラムを崩すと仮面ずれそうぞ

雲よ雲あいつが首を吊つたそな

レットテルを貼られて男腹を決め

反主流だから一揆の血を燃やす

石段の数に車中の酔が出る

ギブアップ嫌い白旗など持たぬ

いくつものドラマをレール見て古び

回るしかない歯車の僕も古い

シグナルは赤で定年来てしまい

制服を脱ぐと本音がこぼれ落ち

カルテ今日レールに脳死言いわたす

旗色が読めず欠席いたします

反抗の口笛五線譜から外れ

ロボットよお前に未来などはない



軍事費にだけはなるなよ税金よ

メーデーの旗分裂へきつと泣く

ロボットに職人技は値切らせぬ

廃線の枕木あくび癖がつく

安楽死させてはくれずレール冷え

枕木が工夫の歌をまだ覚え

国鉄の年金だけじゃ食えまいな



だれが何言おうと俺は汽車が好き

貨車黙々喝采などは当てにせぬ

レール二本敵意を抱いたままに延び

終列車出して自分を取りもどす

七人の敵へ鉛の靴をはく

小骨抜くそんな人事で左遷され

自分史に俺の傷口など書かぬ

正論を敵のまっただ中で吐く

尾は振らぬ僕で生きざまなまぐさい

素直には酔えぬ酒です妥協です

天職とまだ割り切れぬ貨車を組む

不況です金庫もあくび噛み殺す

廻り椅子にはレールの嘆き届かまい

枕木へ過去を問いつめたりしない

いたわりの言葉へ貨車はきつと泣く

ストできる身を駅長にうらやまれ

下積みへ甘い汁などあるもんか

あくび一つ夜勤へ無事の夜が明け

もう逢えぬ別れへ尾灯泣いている

汗まみれの男をノルマ追いまくり

賛成の僕とも知らずビラをくれ

飢えつづく大地へ痩せた虹が立つ

ローカル線死ねと言うのか補助を切り

俺の主義稼ぐ軍手に言い聞かす

思想なき男パチンコ玉を追う



ポイントの反位へ支線生きてくる

国鉄の脆さを雪がまたあばく

薄給を嘆く助役がビラを剥ぐ

狂わない時計が僕を追いまくる

運向いて来たぞシグナル青ばかり

レール錆びて錆びて工夫の詩が死ぬ

踏み絵また踏み絵宮仕えも疲れ

百円玉の攻防ストの夜がしらみ

管理職という名の鎖はめておく

廃線の枕木貨車に逢いたがる

慕われているから僕の歩が軽い

酒でまぎらす父の涙を子よ知るか

また一人敵を作って主義通す

崩れない夢へ枕木妻と敷く

結論が出る頃どんぶり飯も冷え

まわれ右してもやっぱり鬼が待つ

逃げ腰の背で烙印が疼き出す

裏切りへ崩れぬ城を組み直す

明日に夢あるから毛虫生きている

拜んでも俺の主張は曲げられぬ

たたかいを挑む目のまま軍鶏が老い

世の中の隅で正論もみ消され

逃げ腰の僕を義理義理義理が追う

見返してやる気の火種だけは抱く

返り血を浴びて因果な役を終え

主義主張ないからエサで釣ってやろ

末席の一人が叛く矢を束ね

見つからぬ言葉さがしていた無口

逃げ道をひとつ一本気へ残す

男四十 弱者の列で旗を振り

②

握る手を友よともかく信じよう

資本家に弱者の叫び揉み消され

ゲンコツで拭う涙に嘘はない

ぬけ殻の中で再起の血を燃やす

本箱の隅でマルクス色が褪せ



捨て石の男が恐い意見吐く

がむしやらに走り花道見失う

どたん場で友が踏み絵に背なを向け

ジ・エンドへ褪せた叛旗を折りたたむ

妥協して帰る淋しい影を引く

よつぽどの怒りへ日記白いまま

ノルマ追う蟻だその列乱すまい

夢ひとつ一つ枕木妻と敷く

マルクスをいつかきれいに捨てて貯め

雑兵の汗さわやかな詩を綴る

名も知らぬ花旅人を離さない

飢えた日のノルマへ味方売り飛ばす

あゝ亡友よ香る菊の香かぐがよい

友かばうシナリオならば俺が書く

裏切って男さみしい神に逢う

正論を吐いてエリートから外れ

去る者は追わず一人の酒苦い

神様の死角で味方ひとり死ぬ

ライバルの視野でメツキが剥げはじめ

敗北のそれから鎧重たすぎ

再会へ友の羽振りをすこし妬く

腹黒く男仮面をふたつ持つ

雲よ雲おれの裏切り見ているか

エネルギーシユな男無職と思わせず

紙吹雪あしたは友の肩で舞え

世  
相  
の  
抄



64×5 = 320

兵の墓そのバンザイをまだ覚え

同胞の血を東西にぶつた斬り

ポケットで賄賂こつそり目を覚ます

反核を叫ぶ息切れ許されぬ

新米の値は汗かかぬ奴が決め

職安へ男ざかりを売りに行く

首吊れと言うのか肉よオレンジよ

平和説く鎧覗けば核が見え

札束を見ると一揆の血が消える

引退も知らず目白の鯉およぐ

札束に踊る政治はもう飽きた

君が代を新人類よなんと聞く

百姓は死ねと言うのか減反よ

リクルートへ葵の紋を借りて来い

軍拡の風九条を撫でて吹く

／ポツクリ寺の前でばったり逝ってやる

／新米の出来へ案山子も気が重い

／玉音も暑い日だった義手疼く

／リクルートへ解毒剤などもう効かぬ

④ 出稼ぎよ帰れ帰れと稲が伸び



○ 血税の使途も知らないまま払い

天皇バンザイいくさの罪はどうなさる

浸水のここでも市税ふんだくり

地球儀よ眠れ銃声聞かすまい

減反の愚痴を雑草聞き飽きた

／ 神様も偽装結婚とは知らず

／ 軍拡が僕の血税まで狙う

／ あゝ拿捕へ港ねむらぬ夜がつづく

／ かぐや姫藪の二億に目をさます

／ 核ボタンうっかり押したではすまぬ

／＼ 札束で叩きや裏口開けてくれ

／＼ たったいま国が生まれたクーデター

／＼ 政治家になつていただく癖がつき

／＼ 年金で食う晩年の背が寒い

／＼ 赤紙へつづく号令なら受けぬ

／ スパルタの海断絶の子が喘ぐ

／ 資本家の汗に塩分などはない

／ 離農する肩とも知らずトンボ来る

／ 北方に呼べど還らぬ島かすむ

／ ホラ吹きのラッパも不況から湿り

出雲弁で総理本音を吐きなはれ

ニッポンの土もマーマも温かった

校門に死刑執行官が待つ

急がねば核のボタンが目をさます

大臣の口に絆創膏が要る

／＼  
転作の大豆もやはり慈雨を待つ

／＼  
死の灰へ地球の生理まで狂い

／＼  
離農した日から農夫の爪が割れ

／＼  
リクルート天は見逃したりはせぬ

／＼  
あゝ恩赦選挙違反を野に放つ

百年も待てるか明日の米が無い

世も末さ議長のイスを金で買い

引き際の美学総理の辞書にない

サラ金の利息生きてる生きている

義手疼く過去あり君が代を嫌う

／ 逆転無罪やっぱり神はいてはった

／ 八月の画布に怒りを住みつかせ

／ 拝んでも俺の一票やりはせぬ

／ 落選のダルマに罪は無かろうに

／ 良心が眠ると賄賂目をさます

俺が選んだ議員が汚職もう覚え

チエルノブイリ自業自得さ死ぬがよい

影武者の秘書を大臣飼い慣らす

憲法九条ひとり歩きがしとうなり

使い捨てでしたタレント議員落つ

遺骨野に晒して戦後まだつづく

政治家のパズルやっぱり金で解け

政権を握ると法を変えたがり

永田町 札がヒラヒラ舞うそうな

停戦を死の商人が歯痒がり

汚職など知らぬ手のひら陽をはじく

ノーマアの核が地球の裏で裂け

核呪う祈りの夏がまた巡り

政策も錆びてマンネリ野党です

年金へ賽銭ほどの金をくれ

目減りなどさせておくかと家を建て

嘘ひとつ嘘ですまないからあわて

造船の街へ不況が腰を据え

赤ジュータン踏むと反骨ボケかかる

わだつみの声に先生さいなまれ

ゴルバチョフにイライラ暑い夏つづく

花愛す人ならいくさせぬだろ

ステテコで陛下もビール飲みたかろ

ぎつしりと皿に増税案を盛り

原爆忌あの日のようにカンナ炎え

核の傘の下にも果し状が来た

五つ子は神の気まぐれかも知れぬ

天皇の恥は右翼が来て晴らす

候補者のリボンも嘘を聞き飽きた

人間性死刑の朝に取りもどす

ハミングをいつか農夫は忘れてた

札東に出合う竹藪だつてある

原爆ドーム罪の脱け殻かも知れぬ

尻拭いきつと自民にさせてやる

紀子さんの新居にローン無いらしい

消費税にカーテンコールなど要らぬ

絵馬の数神も息抜きできまいな

減反の土へ脳死を言いわたす

大臣の嘘つく白い歯がきれい

靖国へつづくラッパと知らず聞く

スカウトを意識しすぎてから打たれ

消費税やれまた息を吹き返す

錆びついたラッパで軍備ゆり起こす

渡り鳥いくさの国をいくつ見た

飢えた子も飽食の子も仰ぐ月

地球儀の裏は飢えてる泣いている

偏差値がなんだと二浪月に吠え

政治家を斬る一本のペンを研ぐ

指紋まで押さねばならぬ国がある

先生もおとこ毒牙を隠し持つ

腹なんか切れぬが三島フアンなり

紀子さんへうちの梨でも送ろうか

校則と言う名のリンチだつてあり

税務署が来た日不思議に店が混み

農政のピンチ案山子よ泣くでない

不景氣へ男一匹売りに出す

金も息してます利子に居直られ

当選が神の気まぐれから狂う

小便をする間も社長金になり

墓穴まで掘る株券と知らなんだ

政治の匂いブンブンさせて道が延び

十二月 集金人も食い下がり

また議員ですかと汚職記事に飽き

ロボットへ念力などは判るまい

食えるだけくれず税金ふんだくり

公害へ並木黙って枯れてみせ

GNP支えてウサギ小屋で老い

政権交替やはり汚れた金が舞う

農政がコロコロコロとまた変わり

わり箸を割ると汚職になりそう

無罪放免 暈の青さ目に痛い

空手形ばかり候補者撤いて去に

ロボットの宿命ぬくい血を嫌う

甲種合格 悪夢に時効などはない

中流の意識チラシにくすぐられ

拿捕覚悟生きぬく船を北へ向け

毒舌で長寿死神手こずらせ

聖職の神話が音もなく崩れ

もう一枚の舌で示談屋まとめ上げ

飲む打つ買うて心の穴はふさげまい

反核へスタミナ切れはさすまいぞ

凶作へ祭り太鼓の音も冷え

檜山の旅費へ年金まだ足りぬ

赤紙へ兵の人形とはならぬ

ベトナムの和平銃眼から覗く

ヒロシマの風よピカドン語り継げ

恩に着る握手は痛いほど握り

巨星墜つ昭和の秘話を抱いたまま

戦争へ回れ右などさせまいぞ

休耕田叱り天地の神が拗ね

政治家の嘘は閻魔も聞き飽きた

詰め腹を切らす影武者飼っておく

遷宮祭 神の意向は聞かぬまま

職安であゝ学歴を邪魔がられ

バリケード築く机も税で買い

突き刺さる言葉いくつも聞く師走

政治を叱るきれいな票を俺が持つ

倒産のニュース柚湯のなかで聞く

一票にされてる握手とは知らず

手のひらの日銭スラムの汗を吸う

子が戦死してから国旗嫌いぬく

売りとばす田とも知らずに稲が伸び

流れない川を投書のペン叱る

二百カイリ越えてカモメの恋つづく

死者が出て役所も重い腰を上げ

~ 日照権でまたもめそうなビルが建つ

✓ 両輪の中を天皇迎えられ

○ 浮動票ここで一票酔いつぶれ

✓ 泥棒から見ると警察スキだらけ

○ はねたのも撥ねられたのも酔うており

領海侵犯なるほど烏賊がよう釣れる

鬼瓦陽を断つビルをにらみつけ

裏口を開けていたただく票を積む

同じ神信じて戦火また交え

良心が留守で賄賂へ目をつむる

パトカーの事故もパトカー来て調べ

手ごたえもなく農魂を錆つかせ

カセットの経で成仏できますか

外遊になると与野党歩が揃い

大ジョッキあゝ税金を飲んでいる

アフガンに火の手五輪旗ゆれつづけ

地球儀も血の弾圧を泣いてます

バーゲンに議員のイスもあるらしい

難民へ日本は虹の国に見え

次の選挙で一票一揆見せてやる

あゝトマト地上げ屋などは知らず熟れ

正論をあゝ札束が封じ込め

警官へ非行防止を言い聞かす

火薬と血匂う国境線炎える

日本のヘソのあたりで地価が跳ね

√ 札束にしびれ議員を棒に振り

√ 農政の明日が読めないタネを蒔く

√ ピカピカの議員バッジに嘘を詰め

√ 追い風のなかでも野党まとまれぬ

√ 選挙違反トカゲの尻尾切っただけ

リクルート巨悪は闇の中へ逃げ

昔むかしの現人神も癌を病み

統一へドイツは過去も壁も捨て

君が代へあゝ英霊よ目を覚ませ

十二月半ばとぼけることに馴れ

軍拡へ捨てる血税払わされ

落選へダルマやけ酒飲みたかろ

春風が僕の水虫まで起こす

核ボタン正直者に預けよか

血税で戦争ごっこさすまいぞ

大鳥居遺族の叫び聞いて朽ち

温泉が湧いて過疎地の地価が跳ね

死者が出て役所も法を少し変え

出稼ぎもほつと我が家の灯に座り

ひと列車遅らせ遭難から逃れ

し  
サクラサクラ孤児日本の春に酔う

金持ちの苦勞の一つ税に触れ

言い分があるか台風向きを変え

握手した数ほど票が伸びて来ず

亡命の指にダイヤのありつたけ

✓  
税務署の目にもふしぎな金を貯め

〜  
皇后もおんな白髪を染めたかろ

し  
共鳴の政治に遠くいる日銭

く  
色褪せた仁王みだれた世を叱る

く  
くるま椅子の叫びへ政治無力すぎ

黒幕のタクト札束降らせます

春や春松田聖子も恋に泣く

職人のなみだロボット見てしまふ

不景気と別にきっちり税は取る

青い鳥サラ金までも借りて追ひ

飽食のヤングで米の値は知らぬ

大喪へ嗚呼わだつみの骨よ泣け

落人の涙を貯めてダムが満つ

休耕田の上で太陽ひからびる

天皇とおんなじ齢でいて無職

匿名の善意施設の子を沸かせ

金貸さぬ方にも嘘のある師走

倒産も知らず無邪気な子がねだり

大売出し売り娘も欲しい柄が売れ

下積みの汗も王者の夢を抱き

ホームシック星も故郷を指して飛び

出稼ぎは若葉の夢を抱いて病み

金策に影も淋しく辻を折れ

老舗代々陛下が召さる菓子を焼き

どんぶりの温み自白の腹を決め

そこの秘書が大臣ほどの口をきき

神起こす鈴へ汚れた手が迷い

選挙浄化せせら笑って金が舞う

幽霊もダンプの走る辻を抜け

整形の顔とは神も知らなんだ

立ちキューのここでも政治こきおろす

自分でも詐欺師みごとな嘘に酔う

バイブルの手垢善人かも知れぬ

運動会の留守を空巢もうれしがり

大学留年成田でデモの指揮をとり

年金で浄土のキップ買えるかな

祈っても神が昼寝をしてござる

死ぬるまで野党で通す生きざまよ

札束を積んだら罪が消えますか

国道をアリも横切る用ができ

人生の裏道鬼にばかり逢う

手の届く位置から運が向きを変え

朝顔と起きて男に職がない

したたかに生きて運勢気に止めず

氷中花カンナ炎えてるまま凍り

不運なる雪は焼場のうえで舞い

大声で叱る主治医を頼りきり

泣きに来てみれば砂丘の風も泣く

春や春医者も列車も街も混み

鼻っ柱へし折る金を貯めてやる

求人のチラシ無職の手でもらう

藁いっぽん三途の川の瀬でつかむ

逆転へ足で稼いだ票が伸び

も一人の私が賄賂突き返す

泣きに来る人も混じって砂丘混む

文豪のスランプペンも泣いていた

死に場所の国はいずこか山頭火

コツコツと三途の渡し賃を貯め

死刑執行神も一日泣きじゃくり

故郷の風に会うと叛旗がたためそう

大仏を磨いて古都も春を待つ

祈らねば夢が蒸発してしまふ

神よ横向くなわたしが裏切るぞ

あゝ演歌なみだに弱い鬼が酔う

終章の一句菩薩の手にしるす

嘘ひとつ澄んだ仏の目が痛い

死神があきれ程に生きてやる

許し乞う懺悔が神に届かない

飢えた日のペンが怒りの記事を書く

その話よせよ戦さの傷うずく

壁の穴ふさぐ曆に舂めぐる

○  
雨の日の飯場は慣れぬ針を持つ

ボタ山の懐古たぐると風も泣く

血走った視野に損得だけうつる

棟梁が挽くとノゴギリ唄いだす

福耳の僕へ無職の日がつづく

団体が砂の鼓動をかき乱す

代役をこなしてからの運が向く

大臣を覚える頃にもう替り

凡人の夢を菩薩よ笑うまい

人間の焦りカタツムリが笑う

覆水は盆にかえらず辞表書く

線香に慣れてスズメも寺に住み

鈴ふれど神が昼寝をして困る

疼く傷あるからやたらクジを引く

手加減をされた落ち目を悔しがり

耳よりな話いくつも罨が棲む

たくらみの矢は裏切りに合うと外れ

神様の気ままよ黒い肌が泣く

うやうやしく代理は誤字のままを読み

十二月 砂丘を渡る風も急ぐ

師の句碑を訪えばハラハラ落葉舞う

綻びの心みせまい経を読む

正論を封じ込める日金を積む

七面鳥今日は食われる朝が明け



離れ鹿ポツンと古都の鐘を聞き

職安の窓で男が売れ残り

渡り鳥ペレストロイカ見てきたか

真相を握ってからの自閉症

戦犯へ拍手なんか打てますか

○ 青年の樹は北風が好きなのさ

○ 会者定離俺を憎んだままで死に

○ 人情に負けて返らぬ金を貸す

○ 政治家の片手はワイロたぐり込み

○ いつわりの平和か地球病みつづけ

# 酒と仲間の抄



40 x 9 = 750

○  
二次会は負け犬つどう酔いとなり

櫛の目も正しく女まだ老いず

もう捨てるもの無し身軽さを愛し

中年を意識ハンカチ無地にする

情報をたぐれば身内からも漏れ

パズル解く鍵を人妻からもらう



片思いつのる枕を裏がえす

今日こそは手を握ろうかキスしよか

合鍵のどれも合わない恋でした

七難八苦のなかで女難に突き当たる

男いっぴき愛の踏み絵に立ちすくむ

あゝ女だまし上手な風に酔う

ニアミスの予告もなしに恋一つ

針千本のんでも守る愛一つ

恋文の余白でマグマ炎えている

知恵貸した方の思案も底を尽き

伝言板小さな秘密持たせられ

バクダンという名の酒に胃をやられ

辛党のくせに菓子にもうるさ過ぎ

トランプに女きれいな意地を持ち

荒海に詩ありしばし足を止め

制服の処女へ熟年けつまずく

喪の明けたおんな再起のバラを買う

泣かぬ女になってソロバンすぐ弾く

おんな一匹鬼と指切りしてしまふ

げんまんを炎える小指に言い聞かせ

逢うて来た余韻コーヒー入れなおす

温めつつ恋の不渡手形抱く

手さぐりで恋の方程式を解く

ネオン赤あか働き蜂の骨を抜く

悪女にもなれる才女の酒でした

恋捨てに来た日砂丘の砂も泣く

湯の宿で失意のハート縫い急ぐ

埋もれ火の寡婦を起こした風憎む

じわじわと二人で墓穴ほっていた

四面楚歌の男をためす風が吹く

こころ貧しき日なり振り袖でも着るか

示談また捨て身おんなに牛耳られ

顔で笑って心で泣く日酒が要り

愛をつかむと少女の木馬きつと翔ぶ

ゆるみ切るネジを二合の酒で締め

○  
奢られる財布の中を見てしまい

恋のゲームに夢中で出口見失う

春や春恋の矢みんな外れたり

理性まだあって不倫の字におびえ

没個性そんな男がめしを炊く

一行の日記で閉じる友の死よ

臨終を囲みひそかな雨を聞く

人柄がズボンの折り目にも匂い

控え目と別に本音は吐いて去に

神だます女へけもの道つづく

花時計愛に背いた午後に枯れ

蒸発の恋へ終着駅が無い

捨て切れぬ妬心を月よ知るまいな

酔いさめてなんと愚かな愛を悔い

飽き性のおんなにパズルなど解けぬ

二枚ある舌とも知らず夢を賭け

人を恋う夜の雪音もなく積もる

口紅と同じ真っ赤な嘘を吐く

倅せは晴れ着に似合う顔を持ち

飛び乗った朝は車中で紅もぬり

しぶしぶと酒断った夜の胃が痛み

恋や恋両刃の剣で切って捨て

未来凶のあちこち雨が漏りはじめ

まだ思案決まらず緩い帯を締め

古傷がいつそ無口にしてしまう

罨一つおんな小さな隙を見せ

コンパクト迷い断ち切る音で閉ず

失意の日つづき縫い娘の針が錆び

正直に話せば恋が逃げてゆく

逢うて来た余韻一行詩が炎える

三面鏡うらぎる顔が三つでき

札束に崩れぬ僕の積木つむ

始発駅おんなも仮面つけて発つ

なみだ乾いて身をひく愛と知りました



三通話話して好きとまだ言えず

善人に化ける仮面を金で買う

小心の浮気はカスリ傷ですみ

別れ幾たびおんな強気の眉を引く

ネオン哀しやおんなを涙色に染め

ハラハラとおんなが罪の殻を脱ぐ

女が消える過去を塗り潰して消える

火に油そそぐ酒とは知らず酌ぐ

男泣きしたとは日記にも書かぬ

紅一点齡には触れず触れさせず



好色の虫をいっぴき胸に買う

だます気の眉が歪な円を描く

平行線のまままで家裁へもつれこみ

似たような過去あり寡婦を寡婦かばう

口下手なオウムに好きとだけ教え

警戒心解けずどちらも酔い切れず

さよならの涙が重い灯が重い

酒代は安いものさと病んで知る

人違いされてる方も千鳥足

裏切った罪の匂いは酒で消す

良心の亀裂へ沁みる酒を酌ぐ

運勢欄ある日は離婚けしかける

ホステスの耳打ち高いものにつく

まだ思案決まらず緩い帯を締め

いつわりの涙ハンカチ知っていた

談合へボトルも秘密抱かせられ

逢えば崩れるそんな理性を抱いて逢い

北風に晒すと疼く傷ばかり

みだれ髪梳いて不倫の恋ぬぐう

厚化粧へ悪女の相を封じ込め

ゆとりとは別です四人目を妊む

千羽鶴千の祈りを背負わされ

喪が明けてすぐにピンクが着れますか

結婚はあきらめてます預金高

男性不信ペット二匹と住んでいます

雨が降る心変わりを責めて降る

負け犬の俺に二級酒よく似合う

女ですおんなの罨をもう見抜く

男一匹馬鹿になれぬ日酔いつぶれ

剥げかかるメツキへ女なにを塗る

忍の字が僕のポケットの中で死ぬ

最後には造花も散ってみたかろう

骨になるまでピエロを演じ切ってやろ

男泣き見た日北風だまりこむ

良心の呵責ワンカップで消そか

偽善者のなみだ横向く間にかわく

祈る手の指の隙間に鬼が棲む

追えば追うほど愛は手のひらからこぼれ

ねむれる神を起こして春の絵を描こう

遍路旅ぬぐい切れなない罪と行く

だまし舟これも愛だと決めて漕ぐ

花の香に酔うた木馬の不眠症

暗示まだ解けず一本道つづく

主義曲げてバイブル閉じたまま

実印を捺すとその紙しやべり出す

決断を迫るポケットベルが鳴る

もう過去は言うまい明日の絵をさがす

みごとなる嘘だ花束贈ろうか

墓場まで持って行く気の罪ひとつ

地獄耳きようは自分の噂聞く

ほんのりの酔いを訃報が打ち砕く

自戒する日から心に石を抱く

寺一步出ると邪心が目をさます

実らない恋とポストは知っていた

なに思案してか躓く十二月

火の恋へ愛のヒューズが切れかかり

恋すすむ手話は指先から笑う

人生の真ん中辺で君に逢い

よろめけと悪魔に熱く囁かれ

火消し壺へおんなの性を封じ込め

したたかな女で七変化をこなし

血を分けた友に今度は血を貰い

角とれてからの丸みに人が寄り

再婚を祝うに地味な柄を選び

手伝いに来たのが酔うて寝てしまい



勝負には勝って孤独にさいなまれ

味覚満喫しても痩せたい夢を持ち

開店を故郷の父母も来て助け

しぶしぶと酒断つ夜の胃が痛み

風紋のひとこと亡友に似て淋し

絵の中の愛に女がひとり酔う

愛という真綿じわじわ首を絞め

恩赦など不倫の罪にあるもんか

椿散る女になった夜に散る

オリオンの真下で奪う唇よ

金で方つけに来たのが気に入らず

奢られた意味が判らぬままに酔い

本当の涙ひとりになって拭く

逝った友しのぶ箸の手ふと止まり

人生の迷路目印なくあせる

9

サイフにも胃にも手ごろを言い聞かせ

想い出をたぐる哀しい石を積む

酒がでる頃に居ねむり目を醒ます

三行の文からさがす愛さがす

手を合わす時はプライド捨てなはれ



臨終のまぎわも句帳手放さず

呵呵大笑そんな男で策が無い

あべこべに仲裁腹を立てて去に

口下手のファイト黙ったまま稼ぐ

飲めば泣く生涯でした友でした

もち肌のどこへそんなに嘘を溜め

愛冷えてからの仕草が鼻につき

叱られに行く日もおんな帯を撰り

許す気になって素直にリングむく

だます気の誤算だませぬ人に逢い

俺だけの世界句帳と旅に発つ

六道の辻も雪です旅ひとり

黄泉の国友は仏に逢えたらか

友無口笑い袋を持たそうか

鬼才とも言われ偏屈とも言われ

義理でない見舞い手ぶらで来て話す

無心言う時の涙は別に持つ

真相を打ち明けられた友が泣く

冬山を語る男の指が欠け

恩師の訃つげる受話器も哭いていた

酒好きへ酒を持たせて棺を閉じ

この人も善人らしい隙ばかり

印相を変えても味方一人減り

涙雨そうかも知れぬ亡友おくる

借金のごとは賀状に書いてない

ライバルよ末期の水は俺が汲む

骨の軽さよ六尺あつた友でした

百人の敵へ百本バラを切る

あつけない幕切れでした癌でした

火の酒を飲もうライバル逝ったとき

家庭の抄



12 x 5 = 108

260

約束を果たす返り血妻と浴び

父に似た羅漢が我慢しろと言う

スロースローで夫婦のコントまた続く

泥舟もお前と一緒になら乗ろう

襁褓して我が家の陛下ボケはじめ

○  
貧乏神がうちで足踏みばかりする

満天の星の一つは亡父だろう

▽  
恐妻が待ってるあの世なら行かぬ

▽  
喪の帯を解くと強気が崩れだす

○  
倦怠期らしい歯車きしみ出す

父を頼むと閻魔に電話しておこう

ペット代わりにうちでも愚妻飼ってます

着飾ってみても農婦の指でした

妻のスト三日黙ったまま続く

やがて土に還るその日の墓地を買う

✓ 精力減退妻が重荷になつてきた

✓ 一夫一婦の掟をあわや忘れかけ

✓ 妻と子を守る白旗ひるがえす

✓ 妻という鵜匠へ稼ぎみんな吐く

✓ 雨の漏るハートを夫婦縫い急ぐ

✓ 英雄の妻英雄を尻に敷く

✓ 妻の書く喜劇で僕の幕をひく

✓ 反抗期さとすに丸い語をえらぶ

✓ 独酌の悲しいまでに人を恋い

✓ 積木くずしそんな家庭へ夢を足す

∨ 父と子で同じ祈りの雨を聞く

∨ 直線に来てから夫婦歩が乱れ

∨ 死火山の僕へドリンク妻が買う

∨ なみだ壺空になるほど妻が泣く

∨ 妻に子に無冠の僕が支えられ

○  
苦勞させた妻の白髪だ抜いてやろ

○  
ハラハラとさせて娘の恋すすむ

✓  
紅を引く間に妻の気が変わり

✓  
方円の水に娘よなりなはれ

✓  
子を連れて詫びに来たのに茶をよばれ

父の癌かくす嘘なら許されよ

終章できつと笑える夫婦です

極楽の道なら妻と露に濡れ

別々な心で夫婦月をほめ

塾へやる鞭へ合格ちらつかせ

騙された日から騙さぬペット飼う

反抗期の少年とがるだけ尖り

無い無いづくしでも良し俺の城が建つ

知恵貸した方の思案も底をつき

働き蜂のドラマ子が書く妻が書く

レ 入院の前夜も妻が米を研ぎ

レ 言い分が妻にもあつた二日酔い

レ ぼくのドラマのその中心に妻を置く

レ 十二月 母の寝言も金のこと

レ 血の薄い順に涙の通夜ねむい

✓ 予感的中そんな悪夢は妻に伏せ

✓ 家計簿が何か叫んでいる赤字

✓ 駄馬でよしそんな手綱を妻が締め

✓ 絆バラバラ今日落日の章を書く

✓ やり直す気です夫婦の画布白い

✓ さあ今日も稼げと妻が鞭を打つ

し 妻の吹くラッパ内気のネジを巻く

○ 半生を妻のあやつる糸で舞う

バラ色の夢のすき間を汗で埋め

○ 合格へさてまとまった金が必要

✓  
ペットには肉を食わせている茶漬け

○  
ほどほどに締める手綱へ稼がされ

妻叩くかわりにビール二本空け

怒鳴つたら怒鳴り返しもして夫婦

子を庇う踏み絵だ夫婦して踏もう

し 糸は妻おとこロマンを織りつづけ

し 老父泣かす愛馬進軍歌が泣かす

し ばつたりと地獄でいやな妻に遇う

し 妻が今日見せぬ刃を研いでいた

し モンローになる気の妻が化け損ね

✓  
鬼の子を産むと女房が言い出した

✓  
キューピットの弓が愚妻に突き刺さり

し  
聖女の仮面あっさり妻が脱ぎ捨てる

し  
本妻の意地です鍋を磨き上げ

✓  
その踏み絵踏むと他人になれました

✓ あの世まで夫婦で走るダイヤ引く

✓ 泥舟であろうと夫婦漕ぎ通す

✓ 秘密どつきり無口の両手からこぼれ

✓ 静かすぎる寢息を夫婦して覗き

○  
いつからかパーマも当てず化粧せず

▽ 諄いほど妻が念押す旅の酒

▽ トンビから生まれたタカが今日嫁ぐ

▽ 縫い上げて羽織って妻のものでなし

▽ 先祖には無いぞ女難の相が出る

▽ 子が一人できてもミニニをはきたがり

✓ 臨月の腹を子の無い妻が妬く

✓ 満身創痍そんな夫婦でする再起

✓ 反抗期たづな締めたり緩めたり

✓ お隣のボヤも知らずに他所で酔い

✓ 絶好球みおくる俺に金が無い

✓  
申し訳なくも祖先の土地が売れ

✓  
自覚症状言わず一合だけ減らす

失意の日つづきエプロン薄汚れ

✓  
雨の日の夫婦互いに灸をすえ

✓  
癌という言葉に触れず触れさせず

✓ 心貧しき日なりやたらとみな洗う

✓ 妻の仮面脱いで女になってくれ

✓ また妻に話せぬ夢を見てしまい

✓ 医者 of 暗示効いたか熱の子が眠る

✓ 鈍行の夢は子に触れ妻に触れ

妻の目の届かぬ旅の酒に酔う

話さねば怒り話せば気をもませ

葬式へ仏も知らぬ人が寄り

増築の半ばで資金底をつき

離農三日土が恋しい土踏まず

わが城を守るエプロン締め直す

灯を消して母子で亡父をまだ語り

父と子のレール継ぎ目に妻が居る

子ができてからは文鳥放つとかれ

内職で妻も値上げへ立ち向い

靖国の亡父と同んなじ年になり

折れるとこ折れて夫婦の和を保つ

熱の子へ足音までも気をつかい

倦怠期夫婦てんでに ~~ヒ~~ ジョン抱く

妻さえも騙せぬ嘘をひとつ吐く

妻の目の届かぬ酒に酔いつぶれ

貸した金とる口実を妻と練り

主婦として鮎一匹の値にあきれ

飲めぬ酒のんでる訳を子に聞かれ

○ 無神論吾が子が病んでから揺らぐ

道理には叶うが妻の口が過ぎ

生き甲斐にされて過保護な子に育つ

銀婚も近し黙っていて通じ

まだ値切る妻を売場の隅で待ち

せかせかと働く妻に言いそびれ

離婚する金も勇氣もない平和

更年期ですと肩こりあしらわれ

まだ何か塗る気鏡へ向き直り

子の風邪を楯に二次会からは逃げ

味方する子がいて妻も負けとらず

赤紙がそれ切り父を返さない

凡人の野心妻だけ聞いてくれ

高島田 汗で稼いだ金で着せ

鼻声の妻で魂胆あるらしい

子に見せぬ父の白旗だつてある

稼ぐだけのわたしで駄馬の血を呪う

新築へ働き蜂の汗匂う

仏飯を亡父よさあ食べ新米だ

肩組んで三途を妻と渡ろうか

棺の蓋閉ずまで癌は伏せておく

俺の野心と精力妻が持て余す

日めくりも放って置かれる倦怠期

俺が舞う妻の手のひらだけで舞う

金の世に住んで金に見放され

老いて子逆らうだけの金を持つ

結局はボーナス子等の物で消え

さりげなく尻に敷かれてやる平和

味よりも妻カロリーのことに触れ

夫婦して夢を数える指太い

風邪の子へテレビも見ない日が続く

男いっぴき女房ひとり持て余す

嫁ぐ日の晴れ着月賦に触れまいぞ

倦怠期夫婦の鎖のびたまま

帯に短い男に娘もつてかれ

妻の繰る糸で踊ってみようかな

夢ひとつ夫婦は落ちる汗で描く

天の声地の声稲ができ過ぎる

銀婚へ続くアクセル妻と踏む

眠れぬと靖国の亡父つぶやいた

ポツクリ逝くなどと悪妻虫がよい

おさらばだ僕に花道などいらぬ

ヤジロベー義理と恩との中で揺れ

たかが噂に僕もおびえる傷を持つ

開けゴマの呪文が妻にだけ効かぬ

礼智信僕には酒があれば良い

組み立てた嘘をそばから子が崩す

自分史のピリオドだけは俺が打つ

人恋えば雲亡父になり亡母になり

レシートよ僕のアリバイここにある

おはようが素直許そうかと思う

子を庇うシナリオ妻と書きなおす

帰巢性信じ門灯まだ消さず

お茶漬けの湯気へ小さな罪を悔い

俺の汗土は裏切ったりはせぬ

負け犬の靴を黙って妻みがく

せめてもの父の道化だ笑うまい

義理一つ欠くシナリオは妻が書く

子の胸襟とかす言葉を妻と撰る

風邪で寝る働き蜂がすまながら

結婚十年妻のペースに巻きこまれ

小さな罪つぐなうバラを妻へ買う

妻の鞭うけると駄馬の息が切れ

胎教を信じバツハの曲を撰る

野の花が咲くと地蔵も人を恋う

愛の鞭そうとは取ってくれなんだ

中流のサイフはいつも風邪を引き

癌かくす罪なら神も許されよ

ホテルの灯ひとつ一つにあるドラマ

人を恋う姿で地蔵あめに濡れ

子には子の主張があつて朝を抜く

地に汗を吸わせて土の詩つづる

開眼の仏へ嘘は通じまい

一心の祈りへ神も耳を貸す

陰膳の箸はあの日のまま置かれ

子のために上げる白旗恥でない

新入生なりにライバルもうつくり

芽吹くもの見つけた声で子が帰り

愛犬の死は熱の子へ伏せておく

伸びる芽をあゝ両親のエゴが摘む

叛反の矢ある日過保護の子が番え

兼六の陰陽石を妻に説く

強そうな名前オシメの子がもらう

外遊十日あゝ味噌汁の夢で起き

ステテコで内助の妻と茶をすすり

本棚で父のメルヘン色が褪せ

癌ですと言う耳打ちへ立ちすくむ

母の日の母エプロンのままで酔う

一年間貯め山荘の湯にひたり

うだる夜の窓病妻へ開け放つ

まっとうな暮らし星座に見守られ

離婚成立とどめの判は妻がつく

花バサミためらう花の私語を聞く

気みじかが解れぬ糸にしてしまい

リハビリの汗は故郷の土が吸う

蹴る石の一つに怨み言い聞かす

不意打ちへゴキブリびっこ引いて逃げ

腹立てて出れば満月笑うてる

神さまも金の無心は聞き流す

金策はとおに尽きたぞ蟬しぐれ

人を焼く煙の果ての秋が晴れ

✓ 台風一過残暑のかけら持って逃げ

✓ ふるさとの風の中です鎧ぬぐ

✓ 公園に妻とメルヘン買いに行く

✓ 仏壇の父にも新居見てもらおう

✓ 守備範囲広い妻です家に居ず

愛の鞭だったと気付く一周忌

癌という言葉に触れず触れさせず

黄疸を病む子に覬きようも買ひ

立候補の俺のわがまま許されよ

握手するみな一票の顔に見え

市議会へ風穴あける意気に燃え

冷戦中なのに仲人もち込まれ

冥土まで妻がびったりついてくる

とぼけ抜く腹が決まってから眠れ

電報の声家中をみな起こし

子守り唄聞いた祖母の背揉んであげ

気まずさのどちらも冷えた茶をすすり

倦怠期妻カーテンの色を変え

俺の靴 朝のいくさへ揃えられ

ボーナスは無いが打ち込む職を持ち

納棺の母へ別れの櫛をあて

新米の粥 病妻へ炊き上がり

継ぐ子等を信じて過疎の田を守り

表紙すり切れ親子二代を読み継がれ

雨の日の農婦うぶ着を縫い急ぎ

妻風邪で寝て井の日がつづき

十ばかり肩を叩いてからねだり

母の日へ二泊の旅を子が贈り

母が帯締める間下駄を子が揃え

失恋をもう忘れてる娘のいびき

姑の目になつて財布まかせられ

家中のプラン狂わす妻が病み

十二月 子は子で春の夢を抱き

どの注射効いたか熱が下がりがけ

恐いほど食うのに伸びぬ子を案じ

心まで老いたくはない赤を着る

呼びにきた子を肩車して帰り

強冷にして珍客へビール冷え

気晴らしの旅に出てまで妻は編み

半生記つかず離れず妻がいる

## 跋にかえて

柳歴三十年の両川洋々さんの川柳句集「枕木の詩」が上梓の運びとなった。

永年勤務したJR西日本（旧国鉄）を期することあつて退職し、これを節目としての句集発刊である。いいチャンスではあるが、手放して喜んでも居られない気もすることは本音である。しかし、これをステップにして始まる人生と、第二の句集には大きな期待が持てそうなのだ。

重い重い客・貨車を支えている枕木に似る不死身な体力と精神力が彼にはあるのだ。

昭和四十七年、国鉄鳥取川柳会を発足させると会長に就任し、二十八才の若さであつた。三年後には、全国鉄川柳人連盟の第十九回全国大会を鳥取市で成功させている。

若いスタッフと共に国川連の事務局を担当して機関誌「国鉄川柳」や「国鉄川柳句集」の編集発行という責任を無難に果たしている。

この頃から川柳のタネ蒔き行脚は始まり、青谷川柳会・岩美川柳会・鹿野みか

月川柳会・ふじつ莊川柳会・福部川柳会・国府川柳会等など川柳教室から多くの会を発足させる敏腕ぶりを発揮。

彼は異常なほど川柳に情熱を燃やし続け、独特な話術と腰の軽さで仲間をどんどん増やし、川柳の基礎や基本を説き、徹底した伝統川柳の啓蒙に力を注いでいるのである。

「洋々流」と言われるほど彼の作品は、個性と信念を貫き通した発想・表現で仕立てられており、その集大成が「枕木の詩」である。読んで楽しいという川柳ではないが、洋々さんの体臭が染み込んでいる作品ばかりである。

厳つい風体からは想像できない人情家であり世話強いことも三十年の川柳人生を支えて来た原動力になっているのだと思う。

川柳もよく勉強しており、指導者として脂の乗り切っている洋々さんの益々のご活躍を期待してやまない。

平成二年九月吉日

鳥取県川柳作家協会 会長 小林 由多香

## あとがき

たかが川柳——されど川柳

そんな川柳にこだわりを持ちつづけて、今年で三十年になるから早いものである。中学時代から短歌や、俳句らしきものを作っていた文学少年気取りの私が、本格的に川柳にのめり込んだのは高校生となつてからで、故森田茗人先生との出逢いが、それを決定的なものにしました。学生服姿で句会に参加したから、私の美少年振りを記憶の柳友があるかも知れない。鳥取県川柳作家協会長の小林由多香さんは、当時三十代の黒髪ふさふさとした好青年で兄貴のように慕い、故小川源太夫君は二十歳過ぎのやんちゃ坊主と私には映った。

茗人先生には川柳と酒を教わつたが、川柳との出逢いは、私の人生感や価値感さえ変えてしまったようだ。酒は陽気に飲め、川柳の究極は愛だと言うのが師の教えだったと、自分なりに理解して現在に至っています。

鳥取駅輸送室の職場で三十名の仲間達と「国鉄鳥取川柳会」を旗上げして、會長となつたのが二十八歳の時で、大坪天涯君や加藤茶人君などは二十一、二歳の

血気さかな若者だったから、会にも活気が満ちていました。

その後、全国鉄川柳人連盟の全国大会を、鳥取で二泊三日の行程で開催。二〇二名の参加者は川柳人連盟史上初の快挙だと喜ばせたが、大会当日の山陰本線脱線事故で、肝を冷やしたのも懐しい思い出であります。

三年後、連盟事務所を二年間担当し、機関誌「国鉄川柳」と、句集二冊を我々の手で刊行しました。本を作るよろこび、活字の怖さを痛感したのもこの時期で、今もスタッフ全員の自信に大きく貢献していると考えます。全国鉄川柳人連盟という全国ネットワークのおかげで、日本中を旅できたのも川柳の余録だと感謝しております。

以後、連盟幹事や、県川協副会長の大役の任を受けながら、読売新聞、県政新聞、生協新聞などの川柳選者として、数多くの柳友を得たことは、私の財産だと誇れます。

今回、定年まで約十四年を残しての退職にあたり、柳友たちの善意と熱意によって、私の句集を発刊することになりました。三十年間の川柳生活で五万三千句ほどの作品を作っておりますが、いまだこれが私の代表句ですと言いつける句が

一句も無い淋しさを噛みしめている昨今です。

あとがきを書いてみますに、今は亡き柳界の師や柳友の顔が走馬燈のように去来して、なかなかペンが進みません。

弱気になった日も、悲しみのどん底にある日も、私を支えてくれたのはいつも川柳でした。そんな川柳と心中をしてやろうと心に決めてから、川柳がいとおいしい生き物に見えてきたのも事実です。

今後もし生命ある句への挑戦を続けていく決意です。

序文をいただいた川柳塔社主幹の西尾栞先生をはじめ、題字の中原汲香さん、跋を頂戴した県川協の小林由多香会長、そして句集発刊実行委員会の皆さんと、巧印刷さんに心より感謝の意を表してあとがきとさせていただきます。

四十七歳胸でマグマが燃えている

平成二年十月

両川洋々

略

昭和 十八年 五月  
 昭和三十六年 七月  
 昭和四十六年 六月  
 昭和四十七年 三月  
 昭和四十八年 十月  
 昭和五十二年 九月  
 昭和五十二年 十月  
 昭和五十二年 九月  
 昭和五十七年 四月  
 昭和五十八年 五月  
 昭和五十八年十一月  
 昭和六十二年 三月  
 昭和六十二年 四月  
 昭和六十二年 四月

歴

本名 両川 洋  
りょうかわ ひろし  
 雅号 洋々  
ひろし

鳥取市に生まれる  
 川柳作句はじめる  
 全国鉄川柳人連盟幹事  
 国鉄鳥取川柳会会長  
 川柳塔社同人  
 読売新聞とつとり文芸選者  
 鳥取県川柳作家協会理事  
 全国鉄川柳人連盟会長  
 「川柳へのいざない」発刊  
 合同句集「ふうもん」発刊  
 鳥取県川柳作家協会副会長  
 国鉄鳥取川柳会解散  
 川柳ふうもん吟社会長  
 全国鉄道川柳人連盟幹事

川柳句集 枕木の詩

平成二年十月 十日 印刷

平成二年十月二十一日 発行

著者 両川 洋々  
発行者 両川 洋々

〒六八九一―一 鳥取市東大路六四  
TEL (〇八五七) 五一―八四一六  
編集者 句集「枕木の詩」発刊  
実行委員会

印刷所 巧印刷

〒六八〇 鳥取市秋里板建一九七  
TEL (〇八五七) 二四―六二八八